

「自己を表現し、友だちと関わっていく子どもを育てる指導はどうあったらよいか」
～新聞を読んだり、自分の考えを書いたり、考えを見返したりする学習を通して～

指定校2年次 阿南町立富草小学校 早野 洋一

I 本校のNIEの現状

今年度は、NIE実践校の指定を受けて2年目にあたる。

昨年度は4年生の国語「材料の選び方を考えよう」の単元で、見出しにふさわしい写真を選ぶという活動や、記事の内容をよりはっきりと伝えるための技法（アップやルーズ）を学ぶことにより、新聞を作る側、読む側それぞれの立場に立って考えることができた。

学校全体では、昇降口連絡用黒板や保健室前黒板を利用し、行事や季節に合わせて新聞の切り抜きを掲示したり、実践学級以外の学級でもスクラップ帳を使用し、朝の会のスピーチに取り入れてくれたり、新聞支援シートを活用してくれたりする学級が増えてきており、NIE活動に広がりが見えてきている。

II NIE実践のねらい

今年度の研究は、昨年度までの研究をさらに深められるように、新聞に触れる活動を継続していくとともに、日々の生活の中で新聞を開く習慣を身につけ、生活に根ざしたNIE活動について考えてきた。加えて、今年度の子ども達の実態や学力テスト（NRT）の結果分析からは、子ども達の「書くこと、読むこと」の力を伸ばし、要約、説明、論述といった言語活動を充実させていく必要があるという課題も見えてきた。そこで、これらの課題に、生活に結びついている新聞などを活用することで、子ども達に力をつけていけるのではないかと考え取り組んできた。そして、新聞の文章や記事から読み取ったことを進んでまとめたり、発表したり、友だち同士で話し合ったりすることにより、「書くこと、読むこと」の力を伸ばしていくと共に、友だちと積極的にかかわっていく力を高めることをねらいとして実践してきた。

III 研究の概要

1 実践した教科 国語：2、3、5年 生活科：2年 道徳：5年

2 新聞の提供状況

(1) 10年度 購読計画表

新聞名	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
朝日小学生	○	○	○	○			
読売	○	○	○	○			
産経	○	○	○	○			
信濃毎日		○	○	○	○		
中日		○	○	○	○		

(2) 新聞の配置

1階昇降口玄関ホールに長机を設置して新聞コーナーを作り一般紙を、1階職員室前廊下掲示板に小学生新聞を掲示して日常的に児童の目に触れるように配慮した。

(3) 新聞を取り入れた実践をする上で工夫をしたこと

- ①継続的に新聞を活用するための活動を多く行ってきた（毎日のスクラップ、季節を感じる写真集め等）。
- ②昇降口連絡用黒板を使用し、遠足や運動会など行事に関連している記事を掲示して全校児童が関心をもてるようにした。
- ③スクラップ帳を信毎読者センターよりいただき、朝のスピーチや宿題として使用できるように、全校に配付した。
- ④信濃毎日新聞学習シートを全職員に紹介（回覧）し、活用を促してきた。

IV NIE実践の内容

1 2年生の実践

ア 単元名「新聞で四季を見つけてみんなに知らせよう」（生活 全8時間扱い）

イ 新聞の扱い

春、夏、秋、冬を感じる新聞写真を切り抜いて集める。

ウ 単元のねらい

四季の新聞写真を集め、その写真をクラスで発表する活動を通して、自分の思いや考えを相手に分かりやすく伝えたり、友だちの選んだ写真について感想を出し合うこと

ができる。

エ 授業の実際

- ・新聞写真を切り抜く活動は、初めての子どもが多かったため、学年便り等で各家庭に協力をお願いし、一緒に取り組んでいただいた。
- ・新聞を取っていない家庭も多かったが、祖父母宅に行きもらってくるなどして積極的に取り組むことができた。
- ・お家の人と一緒にできたので、いろいろ感想がでて楽しんで集めることができた。
- ・遠足の時、「先生、秋の新聞切ってこんの？」と子どもの方から言いだすようになっていた。

2 3年生の実践

ア 「4コママンガの吹き出しを考えよう」〔新聞に親しむ〕(総合 随時)

イ 新聞の扱い

教師が選んできた4コママンガの吹き出しを考え合う。
自分が読んでおもしろい4コママンガを紹介する。

ウ 単元のねらい

親しみやすい4コママンガを用いて、1～3場面を読みながら、起承転結最後「結」の部分ではどのようなお話を想像して、吹き出しに自分で考えた言葉を書き、友だちの考えを聞き合いながら言葉の表現のおもしろさに気づく。

エ 授業の実際

- ・興味をもって楽しく学習できた。
- ・話のおもしろさや適切な表現などを学ぶことができた。
- ・4コママンガを通して、新聞に興味をもち、他の記事に目を通す子が増えた。
- ・日記帳に気になった記事や写真を選んで切り取り貼り付けて、自分の感想を書く。

3 生活に根ざし、新聞が身近な存在になるような工夫

いろいろな新聞社の新聞を目にする機会をもらったので、昇降口ホワイトボード(本日の予定記入)の下に新聞コーナーを作り展示。また、ホワイトボードの横に新聞の記事をコメント付きで載せたりしている。低学年はイラストが載っているところを探したり、高学年では気になる記事を友達に紹介する姿も見られる。新聞を取っていない家庭もあるので、誰でも新聞に触れる機会が持てるよい場になっている。その他にも新聞記事を目にする場を作り、身近に新聞を感じる環境作りに取り組んでいる。

＜事例1 遠足前の植物の記事＞

朝日小学生新聞に「くらべっこしよう くつつく実をしらべよう」で6種類の植物の紹介があり、遠足2日前からホワイトボードに掲示。遠足当日3年生の児童から「これ新聞に載っていたのと一緒」など実際に植物をみながら、新聞の記事を思い出す場面がみられた。



＜事例2 健康に関する記事(保健室より)＞

記事の中で健康・保健に関する記事を切り抜き、コメントを添えて掲示。新聞記事の中に数多くの健康・保健に関する記事があることを知る場としている。



4 5年生(実践学級)の単元学習の報告から

1 単元名 「物語を作ろう」

2 単元設定の理由

5年生は、男子6名、女子4名、計10名のクラスである。昨年度より本校はNIE研究指定校となり、本学級が実践の中心学級として2年目の活動を行っている。昨年度は「新聞に親しむ」ことを中心に授業を行ってきた。新聞から難しい漢字を探したり、新聞の写真から自分のお気に入りのものを切り抜きそれを1つの作品としてまとめたりしてきた。その結果、子どもたちは新聞を自分の身近なものと感じ、活動を楽しみ、意欲的に行う姿勢が多くみられるようになってきた。これらのことから新聞への抵抗感をなくすためには、内容の読み取りから入るのではなく、新聞を使って楽しむことから入る有効性が示唆された。

本学級は5月に標準学力検査NRTを実施した。その中で、国語でさらに書くこと、

読むことの領域を向上させたいと考えた。具体的には①話の中心の聞き取り、②作文に題を付ける、③書く材料を選ぶの3点である。これらの学力を新聞を活用して向上させることができないかと考えて実践を行ってきた。そこで今回は②③に焦点を当てて授業を行うことを考えた。

②では新聞の投書を利用した活動を考えている。これについては昨年度のNIEセミナーにおいて藤沢市立大庭中学校有馬進一先生が投書活用の実践を発表されている。投書のタイトルをわざと空欄にし、文章を読み取ってタイトルを考える活動を行うことで文章をよく読んで文章中のキーワードを見つける学習が可能となると報告している。信濃毎日新聞の投書欄には「10代から」というコーナーが毎日掲載されている。これは、比較的年齢層が近く子どもたちが共感を持ちやすいと考える。また様々な人の考え方に触れることができるので、自分の考え方との相違点を考えたり相反する考え方や様々な問題解決の仕方に気づいたりすることができるのではないかと考える。

③に関しては、5年『物語を作ろう』の単元を扱う。各自が選んだ一枚の写真を物語の発端とし、そこから浮かぶイメージを手がかりにして、物語のすじ、内容、表現を工夫しながら、想像世界を秩序ある全体としてまとめ上げていくことをねらいとしている。この活動の中で、1枚の写真から受けるイメージをクラス全体で出し合い、そこから自分の物語に合った材料を選び作品を創り上げていくことを通して、書く材料を意図的に選択できる力を付けていきたい。また、作品作りの際は「誰に向けて、どうして書いているか」という、相手意識と目的意識を明確にさせる。こうすることで、読み手を意識した文章表現で書くことができ、推敲をする際の一つの目安となり自己評価、相互評価が可能になると考える。

以上のことから本単元を設定し、単元を展開していきたい。

3 単元の見込み（児童につける力）

(1) 進んで意見を発表し、友の意見を取り入れながら関わろうとしている。

〔関心・意欲・態度〕

(2) 投書のタイトルにふさわしい語句を、文章の中心となる語句に注意しながら文章中にあるの言葉を使いながら、表すことができる。

〔C読むこと(1)ウ(2)イ、ウ〕

(3) 自分が書きたい物語に必要な材料を収集し、全体を見通して整理しながら、自分の思いが伝わるように書くことができる。

〔B書くこと(1)ア(2)ウ〕

(4) 表現の効果などについて、確かめたり工夫したりすることができる。

〔B書くこと(1)オ〕

4 指導上の留意点

○写真は子どもたちが経験したことがあり、イメージを膨らませやすいものを用意する。

○投書のタイトルを当てはめる活動では、ふさわしいものを考えるという観点で考えさせる。

○物語を書く際は、児童の発想を阻害するような指導をさける。

5 単元計画

段階	学習活動の流れ	◎評価の観点☆単元目標との関連	書くことの学習過程
一次	<p>①「写真を選び自分だけの物語を作ろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書や自分がスクラップした新聞の写真をもとに「自分だけの物語」を「文集とみくさ」に載せるために作るという学習の見通しをもつ。 ・クラス全体で写真を1枚選び「連想言葉マップ」を作り、そのマップの言葉から物語のおおまかな内容を考える。(作品作りの疑似体験) ・連想言葉マップをグループで見合いどんな物語になりそうかアドバイスをしあう。 ・各自が好きな写真1枚を選び、「連想言葉マップ」を作り、そのマップの言葉から物語のおおまかな内容を考える。 ・この物語で自分が一番伝えたいことをはっきりさせておく。 	<p>◎1枚の写真から想像を膨らませて自分だけの物語を作ろうとする意欲をもっている。</p> <p>(関心・意欲・態度)</p> <p>☆(1)</p>	<p>課題設定や取材</p>

二次	<p>②「連想言葉マップをもとにあらすじを書こう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞の4コママンガを使い、全員が同じ起承転結を用いた構成で書けるようにする。（「かさこじぞう」の絵本から、前話・出来事・山場・後話という物語の構成の方法を教えて、これと同じように書くということを伝える。） ・前時に決めた「物語の内容」に沿って場面を設定し、小見出しをつける。 ・物語の構成をもとに、あらすじを書く。 	<p>◎ワークシートに沿って物語の条件を設定し、構成を考えて、あらすじを書いている。（書くこと）</p> <p>☆（3）（4）</p>	構成・記述・推敲
三次	<p>③④⑤「あらすじをもとに物語を書こう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あらすじに沿って、仮のタイトルを決めて物語を書く。 ・表現を工夫（擬態語、擬音語、会話文、比喻（直喩、隠喩））しながら書く。 ・まとまりごとに推敲チェックカードをもとに読み返ししながら、書き進める。 ・清書をして、作品を仕上げる。 <p>⑥「主題（自分の思いが一番伝わる・物語の中心となる）が伝わるタイトルをつけよう」（本時）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞の投書欄のタイトルにふさわしいものを考える。 ・グループ内で作品を読み合う。 ・自分の思いが一番伝わる題名を付ける。（自分が考えた仮のタイトル→友達のアドバイスをもらう→自分のタイトルと友のアドバイスとの擦り合わせ→新しいタイトル決定） ・ふさわしいタイトルのついた物語を読み返す。 	<p>◎表現の工夫をしながら、あらすじに沿って物語を書いている。（書くこと）</p> <p>☆（3）（4）</p> <p>◎自分の思いが一番伝わるタイトルを友達の意見を参考にしながら決めている。（読むこと）</p> <p>☆（1）（2）</p>	
四次	<p>⑦「タイトルのついた作品を読み合おう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タイトルのついた作品を読み合う。 	<p>◎表現のすばらしい箇所を見つけながら読んでいく。（読むこと）</p> <p>☆（1）（4）</p>	交流

6 本時案

(1) 主眼

物語が完成した児童が、自分の思いが一番伝わるタイトルを考える場面で、①新聞投書欄のタイトルの付け方を手がかりにしたり、②グループの人にアドバイスをもらったり、③自分の考えと友のアドバイスを擦り合わせてタイトルつける時間をとったりすることにより、主題を意識したタイトルを付けられるようになる。

(2) 本時の位置

全7時間中の第6時

前 時：自分が選んだ写真から考えたあらすじをもとに物語の清書が完成した。

次 時：完成した物語を発表する。

(3) 指導上の留意点

- ・取り扱う投書は人権や子どもの心情に注意をして選ぶ。

- ・読み合う原稿用紙には、その児童が選んだ写真を添えて、イメージしやすくする。

(4) 展開

段階	学習活動	予想される児童の反応	時間	○指導 ☆評価	備考
導入	1. 新聞の投書のタイトルを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・今日はどんな投書だろ？ ・どんなことを伝えようとしているのかわからないな。 ・大切だと思うところに線を引いていこう。 	1 5	<ul style="list-style-type: none"> ○発言の根拠をはっきりとさせる。 ○学習がなかなか進まない児童には、大切だと思う所を一度線を引かせて、その中から 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習カード ・パソコン ・テレ

		<ul style="list-style-type: none"> ・起（前話）承（出来事）転（山場）結（後話）を意識して探してみよう。 	さらに大切だと思う所に線を引くようにさせたり、前時までの活動を想起させる。	ビ	
学習課題 線を引いたり、キーワードを探したりして友だちの物語が一番伝わるタイトルをつけてあげよう					
展開	<p>2. グループに分かれて友達の物語を読みふさわしいタイトルについてアドバイスをする。</p> <p>3. みんなに付けてもらったタイトルをもとに新しいタイトルを付ける。</p> <p>4. 新しいタイトルをつけてもう一度自分の作品を読む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなの物語を読むのは初めてだから楽しみ。 ・桜の写真を使っているから、桜に関係するところに線を引こう。 ・カマキリの写真を使っている、最後対決をしているから「戦いに勝ったカマキリ」がタイトルにふさわしいかな。 ・手をつないだ兄弟の写真で、おじいちゃんとおばあちゃんの所へ初めて二人だけでいくことが多く書かれていたから、「おじいちゃんとおばあちゃん家にいったよ」かな？ ・二つの季節の写真を使って、それぞれの季節にしか感じられないことがたくさん書いてあるから、「春と夏のこと」なんてどうかな？ ・私は、「おじいちゃんとおばあちゃんの家に行ったよ」にしてたけどおじいちゃんやおばあちゃんに会いたい気持ちを書いたからみんなのアドバイスを参考にして、「早く会いたいよ」にしよう。 ・みんなが「カマキリの対決2120年」って未来のことでどんな戦いか読みたくなった、といってくれたからタイトルはそのままにしておこう。 ・タイトルが変わると、今までの作品の感じと違う感じがするなー。 ・友達のアドバイスをもらって、自分の作品にあったタイトルがつけられて良かった。 	<p>25</p> <p>○友達へのアドバイスは原稿用紙に直接メモを書いたり、付箋を貼ったりさせる。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>B評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物語の中心になるところに気づき、タイトルを考えることができる。（学習カード） 〔C評価児に対する支援〕 ・一度話の中心となるところに線を引かせ、その中からさらに中心となるところを一緒に考える。 </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>B評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友の意見を参考にしながら物語の中心を意識してタイトルを付けることができる。（作文用紙） 〔C評価児に対する支援〕 ・友に付けてもらったタイトルと自分の付けたタイトルの似ているところを組み合わせるようにさせる。 </div> <p>☆物語の中心を意識して読みたくなるようなタイトルを付けようとしている。</p> <p>○全体が声を出しての音読になると、集中できなくなる児童がいるので、黙読をさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・写真付き作文用紙 ・本番用作文 	
終末	5. 本時を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・タイトルをこんなに考えて付けたことがなかったからおもしろかったな。 ・みんなにたくさんいいところをいってもらえてうれしかったな。 ・今度の作品発表会が楽しみだな。 	5	<p>○学習カードにタイトルつけに係わる友との関わりや考えの変化・学習感想を記入させる。</p> <p>○数名指名し本時の感想を発言させ、本時のがんばりを認めていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 発言学習カード

(5) 資料

①私は4年生の春から、学校の金管バンドの一員になりました。初めは一番下の学年だったので、いろいろな人に教えてもらいました。

②今年、私は5年生になりました。今度は下の学年に教える立場です。私はしっかり教えてあげられるかどうか心配でした。でも、先生や家族、仲間たちなど、いろいろな人たちに支えてもらって、しっかりと活動することができました。

③9月に開かれた運動会で、私たち金管バンドはマーチングをやりました。夏から練習が始まり、運動会に近づいてくると、

練習はだんだんハードになっていきました。苦しいこともあったけれど、みんなと心をひとつにして頑張ってきました。

④本番では、そうやって頑張ってきた成果を全部出すことができ、マーチングは成功しました。ここまでやってこれたのは、指導してくれた先生、仲間たちのおかげだと思います。

⑤金管バンドの活動は、これからも続いていきます。次の演奏に向けて、また心をひとつにして頑張りたいと思います。

松本市 高橋 彩花
(小学生・10)

心ひとつに頑張る金管バンド

10月3日付け 信濃毎日新聞
「10代から」
＜選定の理由＞
①5年生の同年代である「10歳」投書であること。
②投書の構成が起（前話）：①、承（出来事）：②③、転（山場）：④、結（後話）：⑤となっていること。
③要旨をとらえやすく、キーワードを見つけやすい内容。
例）・金管バンド・心一つ・仲間達のおかげ・がんばりたい

□内を空欄にする。

※主題：作品・文章などの中心になっている考えやことがら。童話・物語・小説ならば主人公の言動や心情のうつりかわり。（児童には「物語の中心」・「一番伝えたいこと」などの言葉を使って学習している）
※タイトル：短い言葉で主題が伝わるような題。

(6) 授業の記録と考察

＜新聞の投書のタイトルを考える＞

I 児：これから国語の授業を始めます。
(単元名を板書)
＜中略＞
T：それでは、机そのままでもいいです。プリントを持って、おへそを先生の方に向けてください。
T：私の思う今日のタイトルはどうですか？
C 児：「金管バンドの一員として仲間と心を一つに」です
T：どうして？
C 児：9月の運動会で練習をすると書いてあったので、そこにしました。
T：C 児さんはそこに着目したんだな。
T：続けてどうですか？ J 児さん。
J 児：大会に向けて心一つにです。どうしてそう思ったかという、最後の列に、心を一つに2つ出てきているからそうだと思います。
T：続けて、F 児さん。
F 児：次の演奏に向け、心を一つにしようです。心を一つにはみんな出ているので、これは確実で・・・。
T：みんなの意見を参考にしてくれたんだな。
G 児：C 児さんとタイトルは同じなんだけど、金管バンドの一員になって、練習がだんだんとハードになって、苦しいけど、心を一つにすれば大丈夫だと思ったからです。
T：C 児さんはそういうことを感じてくれたんだな。はいD 児さん。最後な。
D 児：心を一つにして成功した、マーチングです。理由は、運動会でやったマーチングが成功したのは、心を一つにしたからだを書いてあるからです。
T：いま4人の人が言ってくれました。今日は、キーワードを考えたいと思います。この中や、みんなのプリントの中で、キーワードになりそうな物ある？
T：H 児さん何でしょう。
H 児：心を一つに。

新聞の投書をつかって 名前

<p>私は4年生の春から、学校の金管バンドの一員になりました。初めは一番下の学年だったので、いろいろな人に教えてもらいました。</p> <p>今年、私は5年生になりました。今度は下の学年に教える立場です。私はしっかり教えてあげられるかどうか心配でした。でも、先生や家族、仲間たちなど、いろいろな人たちに支えてもらって、しっかりと活動することができました。</p> <p>9月に開かれた運動会で、私たち金管バンドはマーチングをやりました。夏から練習が始まり、運動会に近づいてくると、</p>	<p>練習はだんだんハードになっていきました。苦しいこともあったけれど、みんなと心をひとつにして頑張ってきました。</p> <p>本番では、そうやって頑張ってきた成果を全部出すことができ、マーチングは成功しました。ここまでやってこれたのは、指導してくれた先生、仲間たちのおかげだと思います。</p> <p>金管バンドの活動は、これからも続いていきます。次の演奏に向けて、また心をひとつにして頑張りたいと思います。</p> <p>松本市 高橋 彩花 (小学生・10)</p>
--	--

ハ
エ
ひ
と
つ
に

- T : 心を一つに。
 J 児 : 同じです。
 T : 同じです、という人？
 T : ありがとうございます。
 T : 続けてありますか？
 T : ないですか？D 児さんお願いします。
 D 児 : 金管バンド
 T : 心を一つと、金管バンドがキーワードになりますね。
 T : これを書いたのは小学何年生？
 O : 5年生。
 T : じゃあ、この5年生が一番伝えたかったことって何だろう？I 児さんどうぞ
 I 児 : 仲間と練習をしてきてよかったこと。
 T : なかまとの練習。
 T : 続けてありますか？
 A 児 : J 児さんののに似ていて、先生や家族、仲間たちなどに支えられていろいろな人に支えてもらっていることとそこまでやってこられたのも指導して下さった先生、仲間たちのおかげでっていうのが、書いてあったからそこだと思いました。
 T : 今みんなでキーワードを探したり、一番伝えたいことを考えてもらいました。今日はこの新聞のタイトル決めを参考にして、みんなとやりたいのはこれです。「今みたいに線を引いたり、キーワードを探したりして、友だちの物語が一番伝わるタイトルをつけよう」ということです。

<考察>

○新聞投書からキーワードを探す学習の積み重ねによって活動の見通しがもてた。
 今回の授業のねらいは、友だちの物語のタイトルをもっとも伝えたかったことに着目してつけることだった。それを達成するために新聞投書のタイトル付けをこれまでに7~8回ほど行って来た。文章の読み方、キーワードの見つけ方など今までの積み重ねによって、本時の活動に見通しをもち、授業を進めることができた。
 ○今までの方法を使えば、本時の学習問題が解決できるという見通しをもたせられた。
 本時は友だちの物語のタイトル決めのねらい達成するために、慣れている新聞投書のタイトル決めを手立てとして、導入に位置づけた。これは、低位生にとって特別な支援であった。最初から友だちの物語のタイトル決めから入るのではなく、本時使う方法を確認してから行うことによって、安心して活動ができたと考える。しかし、この活動によって、本時の主眼である「友だちの物語のタイトルをつける」活動が十分に確保できなかったという反省が残った。

<本時を振り返る。>

- T : じゃあ、まだ終わっていない人がいるかも知れませんが、ペンを置いてください。何も持たずに黒板の方を向いてください。
 T : いまみなさん、友だちから、意見をもらいましたね。何かいい方に変わっていきそうな人いますか？
 (数人挙手。)
 T : ありがとうございます。
 T : 意見をもらったけど、自分が決めた意見で行きたいっていう人いますか？
 T : はい、ありがとうね。
 T : 次の時間、そのタイトルをびしって決めて、自分の作品を完成させたいと思います。いいですか？
 T : 授業の感想いつくれる人いますか？A 児さん。
 T : J 児さんいいね。A 児さんのほう向いて。さすが。
 A 児 : 他の人の意見を聞くと、ああそうだなって自分と違う意見が聞けて良かった。
 T : D 児さん。
 D 児 : みんなの出してくれた意見のおかげで、いいタイトルが決められそう。
 E 児 : みんなの意見と自分が決めていた意見が違って迷うけど、みんなの決めた意見で行きたいです。
 I 児 : えっと、みんなの出してくれた意見と合体させてタイトルを決めたい。
 T : 今の感想もね、自分の心の中にいれて、明日の授業に臨みましょう。
 T : 今日はたくさんの先生方が見に来てくれましたので、先生方の方を向いて挨拶をしましょう。当番さんよろしくをお願いします。
 I 児 : ありがとうございます。

<考察>

○友だちの意見を取り入れながら、自分の作品のタイトルをつけることができた。

授業終盤の感想発表では、「他の人の意見を参考にして、自分の作品にふさわしいタイトルを決められた。」という内容のものが多かった。これは、友だちの考えに有用性を見いだしてきた結果だと考える。新聞投書のタイトル決めでも、友だちの意見を参考にして再度タイトルをつけ直す活動を継続して行って来た。その結果、あの人の意見で悩みが解決した、この人の意見で、自分の考えがまとまった、という経験が、友だちの意見を肯定的にとらえようとする考えに発展していったと考える。

V 研究のまとめ

○新聞を継続的に使用していくこと

今回は、新聞投書を教材化し学習の中心に位置づけ授業を展開した。またこの投書も、新聞に投書した人の年齢が小学校5年生に近い物を使い授業を行って来た。そのことで、記事よりも読みやすい文章で児童も比較的簡単に読むことができていた。そのことがキーワードを探したり、投書のタイトルを見つけたりすることを簡単にしたと考える。

扱う回数も1度だけではなく、定期的に行っていくことで、文章に慣れ、全体の文章を読む時間が短縮されていった。また、キーワードを探す活動でも、タイトルに近い言葉を拾い上げる児童がほとんどになってきた。単発で終わらせるのではなく、継続的に文章に触れさせていくこと、新聞に触れさせていくことが必要になっていくことになると考えられる。

○少人数グループによる活動

今回は、少人数グループでの活動を手立ての一つとして位置づけて授業を展開していった。新聞投書のタイトル付けや友だちのタイトルをつけるときに少人数での活動を行うことで、自分の意見を伝え、意見を関わらせながらの学びの場ができつつあった。本校の教育目標にもある「共同の学び」に近づくことのできる活動であったと考えられる。

VI 残された課題

本年度をもって2年間のN I E実践指定校が終了する。この2年間でN I E活動の魅力や新聞を授業の中で活用していくことのメリットを感じることができた。また、研究部会以外の先生にもN I Eの有効性を伝えることができてきたと考える。しかし、実践指定校ではなくなる来年度以降に、今まで研究してきたことをどのように発展させていくかが今後の課題である。

